

学校における組織的な授業研究の推進に関する研究

- 授業改善リーダーによるワークショップ型授業検討会の事例をととして -

義務教育研修課 指導主事 渡 信雄

はじめに

当所では、平成17・18年度の2カ年にわたって三教育機関（県立教育研修所、県立嬉野台生涯教育センター、兵庫教育大学）における共同研究として、「授業改善リーダー育成のための研修の在り方に関する研究」に取り組んできた。この研究の目的は、児童生徒の確かな学力をはぐくむために、教員の日常的な授業改善へ向けた取組及び学校が組織全体として教育力を高めるための校内授業研究を充実させていく取組の両者を推進していく役割を担う授業改善リーダーを育成するための研修プログラム開発であった。

上記の研究によって開発された研修プログラムを当所の研修講座で実施する中で、受講者の授業改善リーダーとしてのマネジメント能力の育成と自覚の醸成に関して、一定の成果をあげることができた。しかし一方、同僚教員の授業研究に対する参画意識の醸成及び授業検討会の充実・活性化を図るという点において課題が残った。また、本県の小・中・高等学校の教員を対象にした質問紙調査からは、授業を学校教育目標や当該単元・時間の目標に照らして評価し次の授業に生かしていくという、授業づくりにおけるPDCAサイクルを機能させていくことを、個々の教員がより一層意識して取り組んでいかなければならないことが示された¹⁾。

教員がそれぞれのライフステージにおいて学び習得してきた授業観や児童生徒観、授業分析の方法等は、教員個人の知識や学びに終わるのではなく、他の教員の知識や学びにつながり広がることで、学校の児童生徒全員の確かな学力の向上に寄与していくと考える。授業検討会が活性化し、そこへ参加した教員一人一人が自分の授業を改善していくためのヒントを得ることができるとともに、得たことを授業の場で実践することによって子どもの成長や能力向上を実感として感じ取ることができれば、授業づくりにおけるPDCAサイクルが機能し、校内授業研究はさらに充実していくと考える。

そこで平成19年度の研究においては、まず当所における「小学校 授業改善リーダー研究講座」において、近年、会議の一形態として意義や効果が注目されているワークショップ型研修²⁾を取り入れた授業検討会（以下、「WS型検討会」とする）を、受講者の勤務校で実施した。併せて、「WS型検討会」を実施している学校（平成18年度「小学校 授業改善リーダー研修講座」の受講者勤務校）に対して、「WS型検討会」の実施状況等について聞き取り調査を行った。さらに、上記各校で「WS型検討会」を経験した教員を対象に、「WS型検討会」が個人や学校全体の授業改善にとって有効だと感じているかどうかについて、質問紙調査を実施した。本稿では、これらの分析をととして、「WS型検討会」が先に述べた課題の克服と校内授業研究の活性化に関して有効に働くのかどうかについて検証していくこととする。

1 授業検討会におけるワークショップ型研修

(1) 平成18年度の研究において見いだされた課題

平成18年度、上述した三教育機関共同研究で開発した研修プログラムを、当所における「小学校 授業改善リーダー研修講座」と「高等学校 教科研修リーダー研究講座」の両講座において実施した。これらの研修プログラムは、当所での研修と勤務校での実践とを繰り返しながら、受講者が共同的に授業評価シート³⁾を「作成→活用→改善」していくという、実践的な研修方法を採用することで、受講者の授業改善リーダーとしてのマネジメント能力の育成と自覚の醸成を図ることを目的とした。授業評価シートについては、「小学校 授業改善リーダー研修講座」において受講者が共同で作成したものの一部を、図1に示す。本シートは、左側に授業分析の観点を記載し、右側の出来事欄には授業参観中に起こった出来事のうち参観者が特に気にな

観 点	項 目	時 間	出来事		観点・項目	感想・意見
			教師	子ども		
0 学習規律	a 始業の態勢が整えられている。					
	b 子どもに発表のきまりが身に付いている。					
	c 子どもが互いに反応しながら聞き合えるようになっている。					
	d 子どもが集中した授業となっている。					
1 目 標	a 単元目標・構成から考えた本時の目標は適切である。					
	b 本時の目標が明確で適切に提示できている。					
	c 学習の目標を子どもがつかめている。					
2 授業展開	a 時間配分が適切である。					
	b 子どもが深く思考する場面がつけられている。					
	c 子どもの興味・関心・意欲を高め、全員参加をめざしている。					
	d 子どもの様々な力を複合的に育てる授業展開である。					

図 1 授業評価シート（一部）

った点等を、授業者と子どもとの応答関係に着目して記入できるようにしたものである。この授業評価シートは、授業者を「評定」するものではなく、また、実際の授業に即して繰り返し活用していく中で、常に改善されていくことが重要となる。

本研修プログラムを実施したことにより、授業評価シートが授業改善のための校内授業研究において有効であることが認められるとともに、受講者の態度が校内授業研究の中心的役割を担うことを強く意識したもののへと変容するなど、当初の目的であった、受講者の授業改善リーダーとしてのマネジメント能力の育成と自覚の醸成に対して、一定の成果をあげることができた。

しかし一方、研修プログラムを実施したことと併せて、よりよい研修プログラムの開発に資することを目的に本県の小・中・高等学校の教員を対象にした質問紙調査からは、下記の課題が見いだされた。

表 1 平成18年度の研究において見いだされた課題

課題 1	授業づくりにおける P D C A サイクルの中の C H E C K と A C T I O N の部分の充実
課題 2	同僚教員の授業研究に対する積極的な参画意識の醸成

課題 1 は、多くの教員は、児童生徒の学習内容における関心・意欲を高めるとともに、学習内容を理解させ、達成感を持たせる授業づくりに主眼をおいている反面、授業づくりにおける P D C A サイクルのうち、授業を当該授業の目標に照らして評価（C H E C K）したり、評価の段階で見いだされた課題克服のための方策を次の授業へ反映（A C T I O N）させたりといった部分は日頃あまり意識していないという分析から導き出された項目である。課題 2 は、「授業研究を推進する役割は必要だが、他の教員の受け入れ態勢がまだ十分とはいえない」等、勤務校において同僚教員とともに校内授業研究を推進していく際に受講者の多くが不安を抱いたことから導き出された項目である。これらは、授業検討会及び校内授業研究の充実と活性化に向けて、克服していかなければならない課題である。

先に述べた「高等学校 教科研修リーダー研究講座」では、協議・演習においてワークショップ型の研修形態を数多く採り入れることによって成果をあげてきた。また、「小学校 授業改善リーダー研修講座」においても、数名の受講者から、勤務校の授業検討会にワークショップ型研修を採り入れたことによる有効性について報告がなされた。両講座の全般にわたって指導助言を仰いだ佐藤真教授（兵庫教育大学大学院）からも、「授業検討会においてはワークショップ型研修を可能な限り採り入れ、小グループでの議論やホワイトボード等にいつでも書き込めるような場の設定をし、個々の教員がもっている授業観や児童生徒観の違いについてお互いが自由に話し合うことで、授業改善へ向けたよりよい考えを全員で発見しやすくなる」として、授業検討会にワークショップ型研修を採り入れることの有効性について指摘があった。

以上のことから、表 1 に示した課題の克服をめざすとともに、授業検討会を含めた校内授業研究の活性化と充実を図る手段として、平成19年度に実施する授業改善リーダーを育成する研修プログラムの中で「WS 型検討会」を実施し、その有効性について検証することとした。

(2) 平成19年度 小学校 授業改善リーダー研究講座における「WS型検討会」の実施

図2は、平成19年度「小学校 授業改善リーダー研究講座」の研修プログラムである。本プログラムは、平成18年度の研修プログラムを発展させた形で、当所では年間3回の研修として実施した。形態及び目的については、平成18年度の研修プログラムと同様である。

本プログラムのうち、「研修所における第一回研修」の「発表・協議」においては、平成18年度の講座受講者2名が、各勤務校で取り組んでいる「WS型検討会」の実践発表を行った。また、「研修所における第二回研修」においては、兵庫教育大学附属小学校における小学校5年生算数科「式と計算」の公開授業を参観したあとの「協議・演習」の場で「WS型検討会」を試行的に実施した。ここでの目的は、受講者が「WS型検討会」の実際を参加者となって体験し、進行手順や各々が実感したそのよさ及び改善点等を参考にして、「勤務校における実践」の中で、各学校の実態に合わせてその形態や方法を改善しながら、「WS型検討会」を実践するための知見を得ることであった。

図3は、「研修所における第二回研修」における「協議・演習」で活用したワークシートである。1行目にある

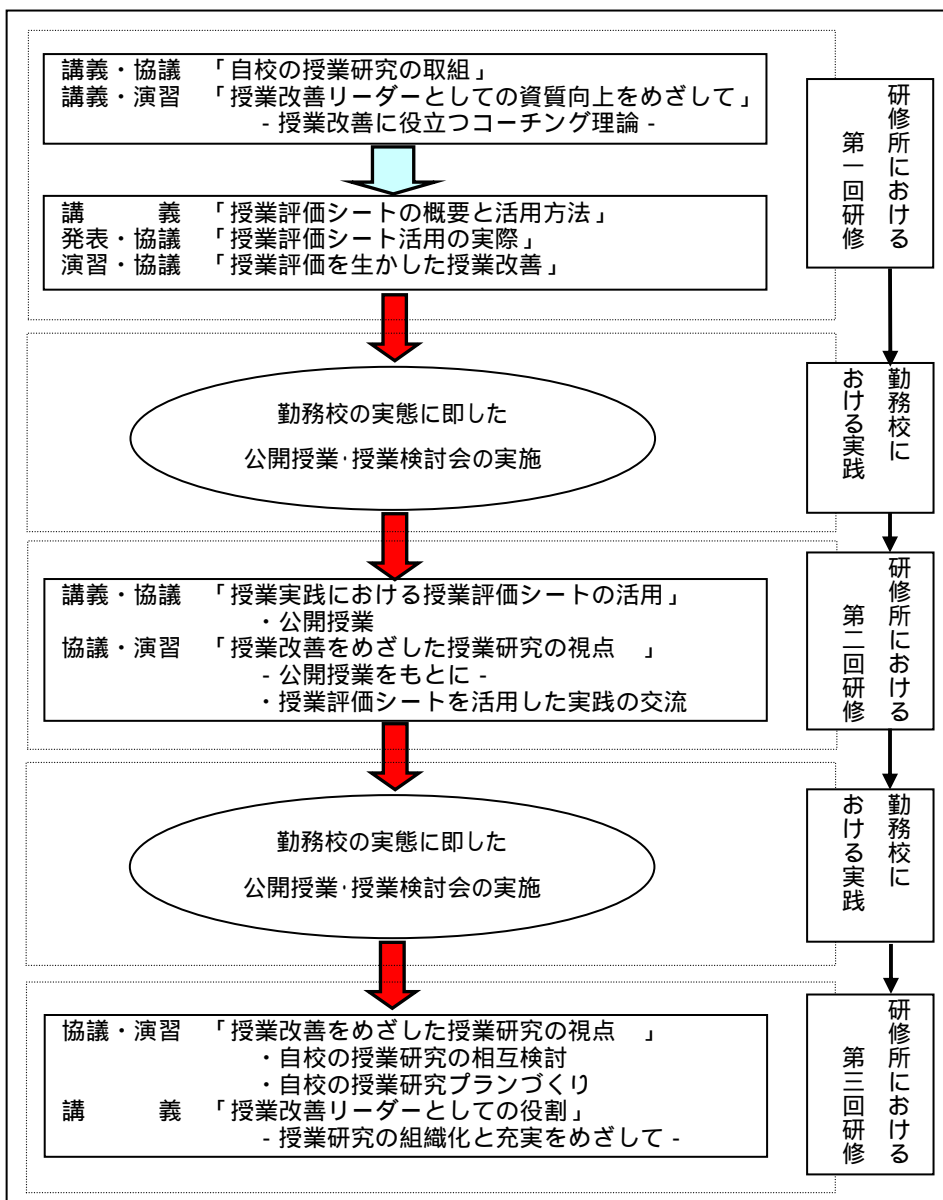


図2 小学校 授業改善リーダー研究講座における研修プログラム

	目 標	授業展開	発 問
成 果	14 種類もの多様な考え方が児童から出されていた。	導入の工夫によって児童は本時目標に向かう課題がしっかりつかめていたと思う。	「もし～なら」と切り返したことで、本時目標に迫ることができていた。
課 題	本時では、「式で表すことのよさ」までは到達しなかったのではないか。	学習内容が多い上に授業時間が延長されたため、まとめの部分で児童の集中が切れてしまった。	「これはおもしろい!」と付け加えたことによって、複雑な式も「おもしろい」にすり替わってしまった。
疑問点	式で表すことの「よさ」とは、具体的にどんなことが。	個々の児童が考えた方法を説明させる際、もっと短時間で効果的に行うこともできたのではないか。	一人の児童の発言を学級全員に広めずに言い放しのような感じで終わらせてしまったのはなぜか。

図3 「協議・演習」において活用したワークシート

「目標」「授業展開」「発問」は、授業者から提示された授業参観の観点である。図3の中に示した記述は、受講者が付箋に記入し、当日の「協議・演習」で協議の中心となった代表的な意見である。表2は、そのときの進行手順である。

表2 「協議・演習」の進行手順

授業で起こった様々な事実に即して記入した授業評価シートの内容にもとづいて、授業者が示した各観点における「成果」「課題」「疑問点」を付箋に記入
模造紙大のワークシートの各セルにそれぞれの付箋を貼り、授業者を交えながら各観点の成果や課題について協議
授業で見いだされた成果と課題について整理
課題に対する改善策の協議
得られた成果や改善策等を各自の授業実践に即して応用

表2にある 及び において受講者は、自分が記した付箋の内容をもとに発言することができるので、発言しやすいとの感想を持つ者が多かった。また、授業者から授業参観の観点が示されたことで、協議の焦点化が図られるとともに、従来実施されてきた会議形式の授業検討会よりも、観点ごとの成果や課題がわかりやすくなるという感想を受講者は持った。多くの受講者は、授業改善を図っていくための授業検討会の一手法として、「WS型検討会」を勤務校で実践することに対して高い意欲を持った。「研修所における第二回研修」終了後、受講者は「勤務校における実践」において、「WS型検討会」を実施した。

2 授業改善リーダーによる「WS型検討会」の実際

図4は、平成18・19年度に小学校教員を対象として実施した「授業改善リーダー研修講座」の受講者（授業改善リーダー）が勤務する学校における、「WS型検討会」の概要である。図中、H、I、Jの3校は平成18年度の講座を受講した授業改善リーダーの勤務校から、「WS型検討会」の実施形態や活用しているワークシート、地域性等を考慮して抽出した学校である。これら3校の「WS型検討会」の実施状況等については、平成19年12月～平成20年1月にかけて聞き取り調査を行った。上記以外の各校は、平成19年度の講座を受講した授業改善リーダーの勤務校である。各校で実施された「WS型検討会」の状況等については、図2にある研修プログラムの「研修所における第三回研修」のうち、「協議・演習」において各授業改善リーダーがそれぞれの「WS型検討会」の様子等について情報交換した内容をもとにしている。

類にある4校は、「WS型検討会」において図3に示したものと同様のワークシートを活用し、進行手順も表2に示したものとほぼ同様である。類の3校は、授業者から示された授業参観の観点にもとづき、KJ法を活用して授業の成果と課題及び改善点を明らかにしていく方法を採用している。いずれの学校も、「WS型検討会」の最後には、その日の協議の結果見いだされた授業の成果と課題及び改善策について何らかの形でまとめ、参加者の共通理解を図る作業を行っている。

類にあるI校は、平成18年度は類の各校と同様、KJ法を用いたワークシートを使用していた。しかし、平成19年度は、公開授業にみられた授業者と児童との応答関係（出来事）のうち、「WS型検討会」参加者の多くが注目した場面を焦点化して協議が進められるように工夫している。具体的にはまず、公開授業中に授業者と児童の発話記録を数名の教員が分担して記録し、その各々に番号を振ったものをプリントにして「WS型検討会」で参加者に配布する。次に参観者は、自分が記入した授業評価シートとこの発話記録とを照合し、授業参観中に自分が気になった点が授業のどの場面の出来事であったかについて確認をする。その上で参観者は、自分が授業のポイントだと感じた部分の授業者及び児童の発話番号を付箋に記入しワークシートに貼っていく。ワークシートは、図4に示したようにシート全体を時系列に沿って進行する公開授業の場と見なし、付箋がより集中して貼られている部分が授業展開のどの場面なのかが視覚的にわかるものを開発している。

類の2校は、ワークシート等は特に活用していないが、公開授業時に参観者が記入した授業評価シートの記入内容にもとづいた活発な協議が行われている。

H、I、Jの3校は平成18年度の講座受講後、授業改善リーダーが中心となって、自校の校内授業研究の推進体制の見直しを行った。その一つとして、平成19年度は各校において教員全員が一入一授業を公開する

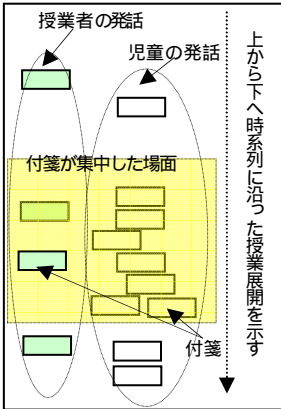
類	類				類			類	類	
学校名	A	B	C	D	E	F	H	I	J	G
活用した ワーク シート例 (略図)										
		発問	板書	教材						
	成果									
	課題									
	疑問									
進行 手順例	1 授業者が本時のねらいや展開等について説明する。 2 授業者から提示された観点(例えば 上記に示した発問・板書・教材の3点)の各々に対する成果、課題、疑問点について、授業者の説明や授業評価シートに記入した内容を参考にしながら、参観者が付箋に記入する。 3 付箋を模造紙大のワークシートに貼り、仲間分けをしながら、授業の成果や課題について協議を進める。 協議するグループがいくつかに分かれた場合は、このあと全体で、各グループのまとめを発表し、それらをもとに他グループと質疑応答及び協議を行う。 4 全員で成果と課題を確認し、参加者個々の授業改善に生かす方法等について考える。				1 授業評価シートに記入した内容を参考に、公開授業において現れた出来事のうち、参観者がよい点及び改善点だと感じたことを自由に付箋に記入する。 2 参加者がKJ法を用いて付箋をワークシートに貼りながら、よい点及び改善点について協議し、仲間分けをしていく。 協議するグループがいくつかに分かれた場合は、このあと全体で、各グループのまとめを発表し、それらをもとに他グループと質疑応答及び協議を行う。 3 協議を経て明らかとなった成果と課題、改善策をまとめる。 H校では最後に、見いだされた改善の視点に照らして、参加者が自分の日常の授業を自己評価する(あるいは、今後自分の授業に改善の視点をどのように採り入れていくかについて、個々の教員が「アクションプランの宣言」を行う)。最後に、招聘した講師から指導・助言を受ける。			【事前準備】 模造紙を4枚貼り合わせたワークシート(実際は横長で使用。右端を授業開始とし、順次左へ時系列で進行)授業者と児童の発言記録・各発言に番号を付す・授業中に貼る 1 発言記録の中から授業のポイントだと思う発言番号を授業者・児童別に色分けして付箋に記入する。 2 ワークシート上のそれらしき場所(時系列)へ参加者が順番に付箋を貼る。 3 全員が貼り終えた後、個々の教員が順次、その発言を選択した理由を簡潔に述べる。 4 ワークシートの記録担当者は、それらの理由を聞きながら、授業者と児童の発言が書かれた付箋間の関係性について色マジックで記入し、授業の構造化を図る。 5 司会者、記録者、授業者の三者で、ワークシートを参考に協議の柱を設定する。 6 協議の柱にもとづいて、参加者全員で公開授業の成果や課題について話し合う。 7 授業者が、授業のねらいや協議の内容にもとづいて、実施した授業を自由に考察する。		
								1 授業者が本時のねらいや展開等について説明する。 2 授業者から提示された参観の観点や授業評価シートに記入した内容を参考に、参観者と授業者間で質疑応答を行う。 3 授業評価シートに記入した内容を参考に、授業者と参観者が相互に公開授業の成果や課題、改善策等について協議する。 J校では、子どもの固有名を出しながら協議を行うという約束事がある。また、全員参加の授業検討会では、招聘した講師による指導・助言がある。授業検討会終了後は、記録係が協議内容と「○○教諭の授業に学ぶシート」に記入された内容とを1枚のシートにまとめて全教職員に配布する。 G校では、授業者から提示された参観の観点ごとに論点を絞って協議する。授業検討会を日常の取組にしていこうという授業改善リーダーの意図のもと、所要時間は10~20分ときわめて短時間である。		

図4 授業改善リーダーによる「WS型検討会」の概要

とともに、教員全員が公開授業を参観し「WS型検討会」に参加する授業研究を年間6回以上実施している。

なお、図4に示した10校すべてで、公開授業参観及び「WS型検討会」の場において、各校の実態に即して改善を加えた授業評価シートを活用していた。また、「進行手順例」については、各学校がそれぞれの実態に即して実施した「WS型検討会」の進行手順を示している。複数校を一つのまとまりとして示している部

分については、各校が実施した「WS型検討会」の進行手順のうち類似している要素をまとめて記載し、学校ごとに特徴的な点については、ゴシック体で付記している。

3 校内授業研究の活性化へ向けた「WS型検討会」の有効性

本章では、第2章で述べてきた「WS型検討会」の実施が、表1にある課題1及び課題2の克服へ向けて、また、各学校における授業検討会が活性化し、個々の教員が自分や学校全体の授業改善における手応えを実感できるような校内授業研究の活性化へ向けて有効に働いたのかどうかについて検証していく。その方法としては、図4に示した10校の「WS型検討会」の実践事例と、これらの学校に勤務し「WS型検討会」を経験した教員79名を対象に実施した質問紙調査の記述内容を併せて分析することを中心に進めていく。質問紙調査の主な内容は表3のとおりである。

表3 質問紙調査の主な内容

- 1 ワークショップ型の授業検討会において、自分の授業を改善していくための視点を獲得することができたか。
- 2 ワークショップ型の授業検討会を継続して実施することで、学校全体の授業を改善していくことに関して効果があると思うか。
- 3 以前の授業検討会と比較したとき、ワークショップ型の授業検討会のすくれている点、そうでない点はある点かどう感じているか。

(1) 課題1の克服へ向けたポイント

ア 授業評価シートの活用

表4 論点の焦点化

- ・授業評価シートを活用することで、協議する内容を精選することができた。(G校)
- ・授業参観の観点を示して論点を絞っていくので、協議の柱がぶれなくなった。(B校)
- ・協議する観点が明確で授業の問題点がはっきりしてくる。(C校)
- ・参観の視点を明らかにして授業参観ができた。また、自分の授業を振り返る上でも参考になった。(J校)
- ・授業を見る視点がはっきりし、授業検討会の中で焦点を絞った話し合いができる。(E校)
- ・観点を絞って成果や課題について協議することで協議内容が深まり、自分の授業における課題が明確になった。(A校)

先に述べたように、図4に示した10校すべてで、公開授業及び「WS型検討会」において授業評価シートを活用している。授業評価シートの様式については、各校がそれぞれの実態に応じたものに改善しているが、おおむね図1に示したように、授業分析の観点を示しながら授業での出来事を記入するようになっている。

この授業評価シートにある授業分析の観点を活用して、どの学校においても、授業者が事前に授業評価シートを参考に自分の授業を参観する観点を2～3点提示している。そのことによって、授業を参観する視点や「WS型検討会」における協議の論点が焦点化され、協議内容が深まるとともに自分の授業を改善していくポイントが明確になっていったことが、表4の記述からうかがえる。

イ 付箋の活用と少人数グループでの協議

表5 多様な意見の交流

- ・多くの意見が出されることで、他の教員の授業観を知ることができ、自分の授業改善の参考になる。(F校)
- ・いつもより多くの角度から意見をいただいたことで、自分の授業に不足している点が明確になった。(D校)
- ・多様な意見交流が可能となり、本時のねらいや学習規律、授業展開などの様々な点において有益なアドバイスを得ることができた。(H校)
- ・全員が発言できるので、それぞれの意見から学ぶことがたくさんある。その中で、改善策についても検討がなされるので、自分の授業改善にとって大いに参考になる。(I校)

多くの学校で、「WS型検討会」に付箋を活用している。公開授業の中で参観者が特に印象強く受け止めた出来事や授業者から提示された参観の観点到即して、成果や改善点等を記入し、それをもとに少人数のグループで協議を行うという形態をとる学校が多かった。

付箋に意見を書くことで、個々の教員が自分の考えを一度まとめることができること、また、書いたもの

があることに併せて少人数グループで協議を行うので、どの教員も自分の意見が出しやすいことが表5にある記述からわかる。さらに、意見表明の容易さが理由となって参加者全員の発言が促され、多くの意見が交流されることとなり、結果、参加者は多様な角度から授業改善の視点を得ていることも表5からわかる。

ウ ワークシートの活用

表6 共有財産の蓄積と授業改善ポイントの明確化

- ・ワークシートを作成することで、協議内容があとに残り、学校の共有財産となる。(H校)
- ・公開された授業が時間軸に沿って構造化されてあとに残るので、必要なときに取り出して自分の授業の参考にすることができる。(I校)
- ・ワークシートを活用することで、自分の授業の改善点がはっきり目に見えてわかる。(I校)

様式は違うが、図4に示したように「WS型検討会」でワークシートを活用している学校が多い。ワークシートを活用する利点として、表6にある記述からは次の2点を読みとれる。1点目は、付箋の仲間分け等の活動を通じて、協議の進展によって刻々と明らかになってくる授業の構造が参加者間で視覚的に共有されるので、自分の授業改善に必要なポイントがわかりやすくなるということである。2点目は、ワークシート上には協議内容が残っているので学校全体の共有財産となることと、それを誰もが見やすい場所等に保管することで、いつでもそのときの協議内容を振り返りながら自分の授業を改善していく際の参考にすることができることである。

上記ア、イ、ウ以外にも、課題1の克服において有効と思われる特徴的な取組を実践している学校がある。例えばH校では、「WS型検討会」の最後に参加者全員がその日の協議で見いだされた改善の視点に照らして、自分の授業を自己評価する場面を設けている。また、先に述べたように・類に属する学校では「WS型検討会」のまとめの場面で、見いだされた成果や改善策について共通理解する場を設けている。個々の教員が自分の授業を振り返るとともに、次の授業実践へ向けた意欲付けを行う場面を意識的に設定することで、授業づくりにおけるPDCAサイクルの中のCHECKとACTIONの部分のさらなる充実化を図っている。

上記ア、イ、ウから、参観する観点が焦点化された授業参観を行い、論点が絞られた多様な意見の交流とワークシートの活用による協議内容の視覚化を図る等の工夫を採り入れた「WS型検討会」を実施することで、参加者は自分の授業改善を行っていくポイントをより多く得ていることがわかる。

(2) 課題2の克服へ向けたポイント

ア 公開授業と「WS型検討会」の継続的な実施

表7 授業研究に対する意欲の醸成

- ・年間をとおして全員が公開授業を実施し、相互に授業実践力が高まっていくので、多くの仲間から刺激を受けやりがいが出てくる。(J校)
- ・相互に授業を公開し検討を積み重ねることで、学校全体の授業改善に向けた取組姿勢により変化が起きている。(J校)
- ・全員が公開授業を実施することにより、みんなでよりよい授業を創りあげていこうという意欲がわいてくる。(I校)
- ・全員による公開授業の実施と授業検討会の協議を重ねることで、一人一人の授業が少しずつでも改善・向上されると、学校全体の授業改善となる。また、全員参加による授業検討会なので、個々の教員の中に「～していこう」という意欲が共通に醸成される。(H校)
- ・参加者全員が発言する授業検討会を積み重ねるにつれて、学校全体の授業改善においてより共通した理念や指導方針、指導方法等が職員間で相互理解できてきた。(H校)

表7にあるH、I、Jの3校は、平成18年度の講座を受講した授業改善リーダーが勤務する学校である。どの学校も、公開授業と「WS型検討会」とを年間をとおして計画的・継続的に実施している。さらには、第2章で述べたように、所属する教員全員が一人一授業を公開し、全員が協議に参加する「WS型検討会」を年間6回以上開催している。

表 7 にある記述からは、「自分の授業が徐々に改善されていく効果を実感している」、「継続することで授業改善に関する様々な視点が発見できるので効果を感じている」、さらに、「」による相乗効果で、学校の中に授業研究の方向性に対する共通理解が促進され、学校全体で授業改善に取り組んでいこうとする意欲が醸成されている」などの効果を個々の教員が実感し、自校の「WS 型検討会」を意味あるものとして位置づけていることがわかる。

イ 同僚教員間で相互に学び合う雰囲気づくり

表 8 参画意識の醸成

- ・経験年数に関係なく誰もが対等の立場・条件で意見が出せるので、雰囲気がよくとても話しやすい。個々の教員の研究に対する参加意識が高まっている。(H校)
- ・公開授業や授業者、学級の児童の様相から相互に学び合うという基本的な枠組みの中で、発言が否定されることがなく自信をもって参加できる。授業者になった場合も、参加者からのアドバイスを素直に聞くことができる。(I校)
- ・生徒の固有名を出しながら授業の成果と課題について話し合うことで協議内容が具体的に深まるとともに、他学年・他学級の生徒理解が促進される。(J校)

上記 3 (2) アとも関連するが、公開授業と「WS 型検討会」との計画的・継続的な実施は、参加者の誰もが授業者となり参観者となる関係性を生み出す。その中で、参加者全員がお互いの立場に寄り添いながら協議を進めていることが、表 8 に示す I 校教員の記述からわかる。また表 8 からは、各校において同じ学校に勤務する教員同士がそれぞれの独自性や多様性を尊重することでよい雰囲気をつくりだし、相互の授業実践から自分の授業を改善していく際に必要となる要素を学び合う学校風土が醸成されていることもうかがえる。

H 校では、「WS 型検討会」以前の授業検討会ではほとんど発言のなかった教員が、誰の発言も認め合い相互の授業実践から学び合う「WS 型検討会」を継続して実施してきたことにより、発言が積極的になるとともに、発した意見が受け容れられ全体の場で話題となることによって自信を持つようになった。その結果、現在その教員は校内授業研究に対して積極的な参画態度になってきたこと、また、他の教員もよい影響を受けて学校全体の校内授業研究に対する参画意識が高まってきている。

J 校では、「WS 型検討会」において協議を進める際の約束事として、授業者と生徒が今日の教材で授業した事実について語り合う、授業者に感謝の気持ちを込めて全員が発言する、発言の中には生徒の固有名を入れる、の 3 点を授業改善リーダーが率先垂範しながら継続実施してきている。その結果、同校の教員の多くは、生徒の固有名を出し合い、個々の生徒の成長やつまづきをそれぞれの生徒固有のかけがえのないものとして受け止めながら協議を進めるとともに、「WS 型検討会」で得た授業改善の視点を個々の生徒に即して効果が上がるように工夫しながら、自分の授業改善に取り組むようになっている。

「WS 型検討会」で協議された改善の視点等を個々の教員が自分の授業に引き寄せて実践を重ね、次の「WS 型検討会」において重ねた実践の成果や課題を相互に交流するという繰り返しを経ることで、さらに新たな授業改善のための視点を得る。そして、また授業改善を試み、次の「WS 型検討会」における協議を経て新たな視点を得る。H、I、J の 3 校では、こうした繰り返しの中で、個々の教員の授業研究に対する参画意識が高まってきている。

上記ア、イから、教員が相互の独自性や多様性を尊重しながら学び合う「WS 型検討会」を計画的・継続的に実施することで、各教員は自分の授業がよりよく改善されていく実感を得るとともに、学校全体の授業改善を全員で一緒になって創りあげていこうとする意欲が喚起されていることがわかる。

4 新たに見いだされた課題とその解決へ向けて

第 3 章で述べてきたように、校内授業研究に「WS 型検討会」を採り入れることによって、授業づくりにおける P D C A サイクルの中の C H E C K と A C T I O N の部分の充実と同僚教員の授業研究に対する積極的な

参画意識の醸成に寄与していくとともに、校内授業研究が活性化していくことがわかってきた。しかし一方、以下に述べる３点が課題として見いだされた。

(1) 協議においてよりよい成果をあげるための人材の育成

数名の教員は、「協議の論点が絞られすぎているため、それ以外に協議内容が広がっていかないことがある」という課題を提示している。また、授業改善リーダーは、「議論が発散的になったり、焦点化しすぎて広がりが出なかつたりすることがある。自分も含めて、協議をまとめていく能力をもった人材を育成することが必要である」という課題を持っている。

「WS型検討会」をさらに充実したものとしていくために、協議の進展に伴って変化する参加者の協議内容に対する関心と「WS型検討会」で見いだすべき公開授業の成果や課題に対する改善の視点等との兼ね合いを考えながら、協議内容をまとめていくことができる人材を育成していくことが必要である。解決へ向けての方法としては、各校の研究推進委員会等で公開授業の持ち方や「WS型検討会」の進行手順及び協議内容のまとめ方、効果的なワークシート活用の方法等について、事前に協議して共有しておくことが考えられる。これら協議・共有したことを実践し、得られた成果と課題を再度協議する。こうしたことを継続して実施することで、「WS型検討会」を効果的に運営していく方法等が蓄積・創造されるとともに、それを推進する複数の人材を育成していくことについても可能になると考える。

(2) 校務全体との調整が図られた校内授業研究全体計画の作成

「担任している学年や実施時期によっては、１ヶ月に複数回の授業検討会はやや重荷である」等の課題をあげる教員がいる。公開授業と「WS型検討会」を計画的に継続して実施することが、教員個人や学校全体の授業改善において有効に働くということは、第３章で述べた。学校には多くの教育活動があり、社会の変化等に伴って期待されている役割も増えてきているが、児童生徒の確かな学力をはぐくむために、校内授業研究を充実させていくことは学校が果たすべき重要な役割である。学校においては、学校教育目標に照らして育成していく児童生徒像を明確にして、校内授業研究を学校教育活動全体の中に適切に位置づけるとともに、校内授業研究の全体計画をそのねらいや期待される効果とともに教員へ具体的に示しながら作成していくことが求められている。

この解決に向けては、例えば、年度当初に教職員全員が参加して校内授業研究の年間計画を作成する段階で、前年度の学校評価において見いだされた授業研究の課題や意義等を確認し、本年度の校内授業研究では「何を重点的に研究していくのか」ということを共有しながら研究目標を設定する協議を、ワークショップ型研修で行うなどの方法を探ることが考えられる。こうしたことを行うことで、教職員一人一人が勤務校の授業研究における意義やねらい、さらには、自分が校内授業研究全体計画の中でどのような位置にあり、どのような役割を果たしていけばいいのかを、自分の問題として考えていくことが可能になる。また、個々の教員の授業研究における負担軽減の方法としては、教職員全員が参加する「WS型検討会」と少人数で実施する「WS型検討会」をバランスよく配置し、全員参加の場合は授業参観を行うが、少人数の場合は授業をVTR等に録画しておき、それを見ながら協議を進めるなどの工夫を行うことも考えられる。

(3) 学校の実態に応じた「WS型検討会」の実施

児童数の少ない学校の教員の中には、「『WS型検討会』の型にこだわるのではなく、その目的を全員が共有し議論しあえばよいと思う。本校のような学校規模であれば、すべての授業検討会をワークショップ型で実施しなくてもよいのではないか」、「公開授業の教科や授業検討会のねらい等に照らして、様々な授業検討会を実施していく必要があると思う」等の意見を持っている者もいる。

今回の研究では、児童生徒数等の学校規模や学校として積み重ねてきた校内授業研究の実績等、各学校の特徴的な研究実態に即して、「WS型検討会」のより適切な進行手順やワークシートの活用、適正な協議人数などを考察するということまでは至っていない。しかし、こうした課題の解決に向けても研究を進めていかなければならない。4(2)の内容とも関連するが、各学校の実態に即した様々な授業研究の方法を開発して

いくためにも、ワークショップ型研修の形態やその各々が授業改善においてどの程度有効に働くのか、また、活用するワークシートの様式とその効用など、より多くのデータ収集と検証を行い、各学校のニーズや課題に対応した「WS型検討会」のモデルを提示していく必要がある。

おわりに

本稿では、校内授業研究の活性化と充実を図るための方策の一つとして、「WS型検討会」を取り上げ、その有効性について検証してきた。「WS型検討会」を実施している学校においては、校内授業研究の活性化へ向けて様々な工夫を凝らし、教員個人や学校全体の授業改善において着実に成果をあげている。また、これらの学校に勤務する多くの教員は、「WS型検討会」の実施が授業改善と校内授業研究の充実に向けて効果があることを認めている。

しかし一方で、第4章で述べたような課題もみられる。これら3つの課題のそれぞれには、個々の教員の持つ葛藤や問題意識が含まれている。各学校においては、校長のリーダーシップのもとで、学校教育目標の実現に向けて同じ学校に勤務する同僚教員相互がこれらの葛藤や問題意識を共有しながら、児童生徒の確かな学力をはぐくむための校内授業研究の充実を図る地道な教育活動に継続して取り組んでいくことが、今後大切になってくると考える。本研究が、県内各校における校内授業研究の充実を図る際の一助になるとともに、各校の授業研究が活性化していくことを期待する。

注)

- 1) 藤井雅英、岡田学、岡本育夫、門脇千里、白石守、芦谷直登、渡信雄、高橋信之、上田浩嗣「授業改善リーダー育成のための研修の在り方に関する研究 - 授業研究の組織化と充実をめざして - 」『研究紀要第117集』、兵庫県立教育研修所、2007、pp.1-14
- 2) 村川雅弘編著『授業に生かす教師が生きるワークショップ型研修のすすめ』、ぎょうせい、2005
著者は本書の冒頭部分でワークショップ型研修の意義を、 達成感を生み出しやすい、 世代や専門性を超える、 協同的な解決・創造に適している、と述べている。
- 3) 平成17年度の三教育機関共同研究により、学校として授業改善を推進していく視点の一つとして、教員と児童生徒との応答を大切にする視点を導き出した。こうしたことをもとにして当所では、授業検討会の参加者が共同で授業改善の方向性を模索していくための授業評価シートを開発した。授業評価シートの詳細については、常陰則之、石井稔、山田修爾、門脇千里、岡本育夫、岡田学、渡信雄、高橋信之、野口博史「授業改善リーダー育成のための研修の在り方に関する研究（中間報告） - 授業研究の組織化と充実をめざして - 」『研究紀要第116集』、兵庫県立教育研修所、2006、pp.66-69を参照のこと。

<参考文献>

- ・佐藤真編著『「総合的な学習」の授業評価法』、東洋館出版社、2003
- ・藤岡完治『関わることへの意志 - 教育の根源』、国土社、2000
- ・稲垣忠彦、佐藤学『授業研究入門』、岩波書店、1996
- ・山住勝広『活動理論と教育実践の創造 拡張的学習へ』、関西大学出版部、2004
- ・西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か』、新曜社、2007
- ・ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』、産業図書、1993
- ・野中郁次郎、紺野登『知識経営のすすめ - ナレッジマネジメントとその時代』、ちくま文庫、1999
- ・ヴィヴィアン・バー著、田中一彦訳『社会的構築主義への招待』、川島書店、1997
- ・「特集 教科指導について考える」、『兵庫教育』2008年1月号、兵庫県教育委員会、2008